演藝畫報

第十年十月號

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十年九月廿一日印刷（毎月一回）
昭和十年十月一日發行（毎月發行）
〔實價壹圓〕第百九輯 第十年十月號

藝妓 糸八
嵐璃笑

二代目 小代信

無代進呈

進呈方法

オリヂナルクリーム
大瓶（五十錢）の空函
一個引換に小瓶一個進呈

オリヂナルクリーム
小瓶（二十五錢）の空函
一個引換に別小瓶一個進呈

オリヂナルクリーム

ガンシンバ

本舗
株式會社 安藤井筒堂
東京市日本橋區水天宮前

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理

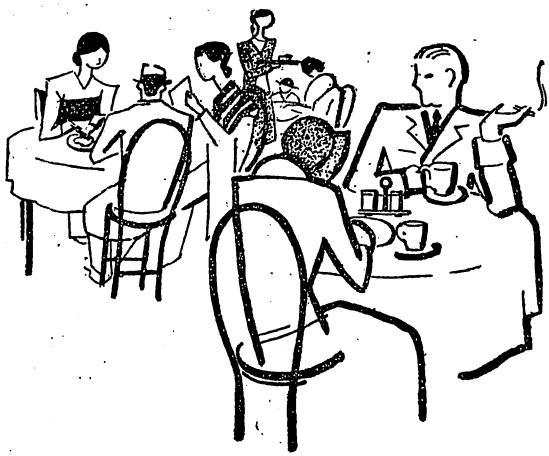
芝居情緒と食道樂

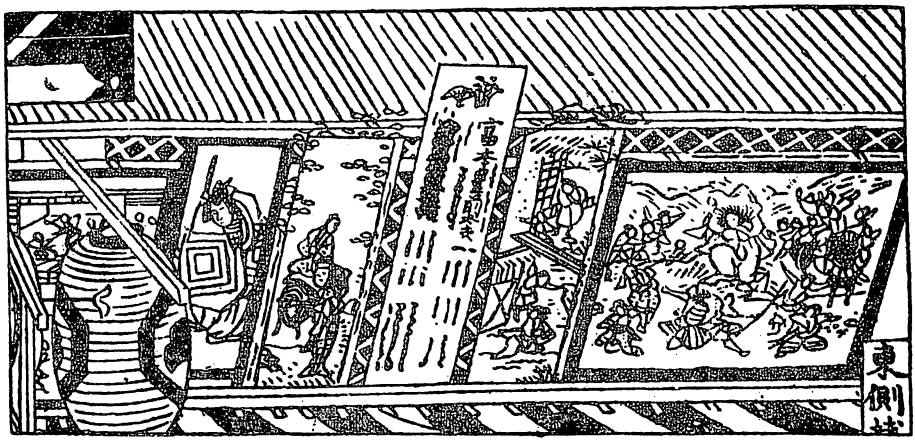
喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！

支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋





◇道頓堀・第百九輯・十月號◇

★口　繪★

東京新派(歌舞伎座)十二番の聖歌　福田吉太郎・井上・各舞臺面・福田內妻その子・花柳・仇吉と米八・藝者仇吉・喜多村・各舞臺面・藝者米八・河合・丹次郎・伊井・藝者小糸・英・二人妻・お雪・喜多村・山本俊作・井上正夫・俊作娘君子・花柳・坂崎精二・伊志井・俊作の妻悅子・河合・婦系圖・お蔦・花柳・新國劇(中座)關の彌太ッペ・島田・箱田の森介・辰己・霧笛・お花・長島・代官坂の富・小川・千代吉・辰己・前進座(浪花座)悲戀の白拍子・白拍子・國太郎・各舞臺面・清水の次郎長・次郎長・長十郎・森の石松・甲斐右衛門・女房お蝶・芳三郎・關西新派(角座)維新の女・清岡半二郎・中田・宮澤吉之助・山口・有罪無罪・弟寺田・友子・梅野井・維新の女・お町・梅野井・垣村良介都築(文樂座)繪本太功記・由良の湊千軒長者・鄭元國務總理の書・南地温習會・寫眞

★表　紙……長谷川小信氏筆

新國劇の現在を語る……長谷川伸(二)

「梅暦仇吉と米八」上演に就いて……木村富子(四)

歌舞伎座出演に就いて……井上正夫(四)

●劇團を語る●

關西新派よ健闘せよ……菱田正男(六)

關西新派の人々……高谷伸(八)

東京新派あれこれ……大橋孝一郎(一〇)

前進座を語る……氏川溯江（一一）

誌上舞臺 關の彌太ッぺ……中座新國劇……（一四）

相手役……久松喜世子（一八）

前進座ファン記……姉小路孝（一八）

私の女房役と劇團の變轉……（1）……都築文男（二二）

誌上舞臺

清水の次郎長……浪花座 前進座……（二五）

仇吉と米八……歌舞伎座 東京新派……（二七）

芝居印象記

●歌舞伎座と浪花座……西尾福三郎（三〇）

●中座と角座……堀川哲（三二）

前進座十月狂言に就いて……岸本雄次郎（三四）

「悲戀の白拍子」に就いて……落合三郎（三六）

梅野井秀男を語る……森ほのほ（三八）

白井社長の上海行……（一六）

十吾と笑を語る會……（一七）

俳優似顔繪頒布……（三七）

カット。扉……山中幸三

編輯後記……村上勝（四〇）

天下の銘酒

白雪（シラユキ）

秋深く酒いよいようまし

摂津・伊丹・灘
小西酒造株式會社

東京大新派
總勤員十月興行
大阪歌舞伎座

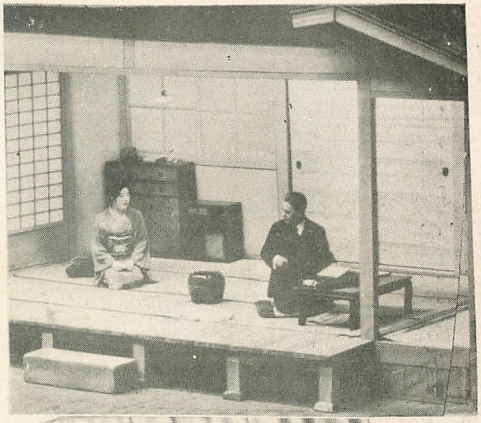
「十二番の聖歌」

福田吉太郎……井上正夫

上・下……各舞臺面

「十二番の聖歌」　舞臺面

福田の内妻その子
花柳章太郎



ドーコレイヘイタ

流行歌

旅笠しぐれ

（六八七一）

林伊佐緒

イサオ・バヤシが心をこめての贈もの！

林伊佐緒

伴奏 N・O・樂團

戀の別れ路

澤雅子

伴奏 N・O・樂團

流行歌

峠の花

（五六三七七）

新橋喜丸代

新人美聲妓による秋第一の魅惑盤！

喜丸代

伴奏 タイヘイ和洋樂團

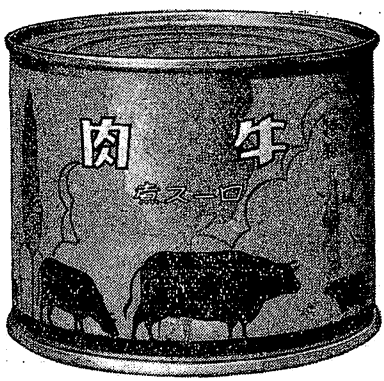
濡れて來たのに

伴奏 タイヘイセレナーダス

ニットーレコード

金鶏印罐詰二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい



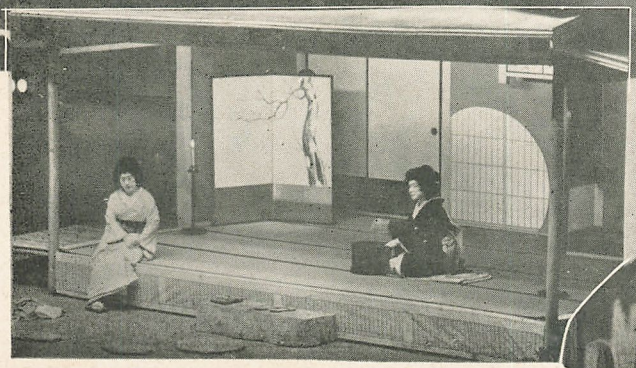
洋酒•飲料水•罐詰

株式會社 横山商店

大阪東區豊後町三

「仇吉と米八」

藝者仇吉……喜多村緑郎・下舞臺面

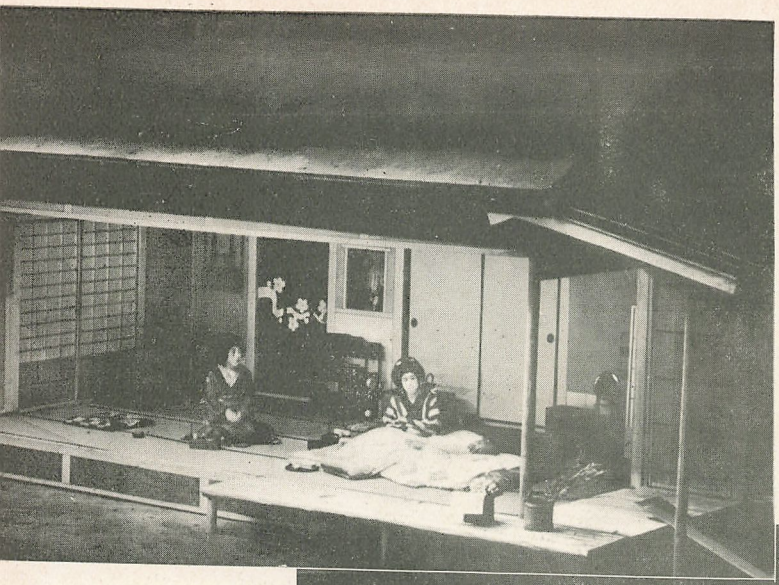


「仇吉と米八」

藝者米八

……河合武雄

↓



上……その舞臺面

中唐琴丹次郎・伊井友三郎

下藝者小糸・英太郎

「二人妻」

上
日比野雪お……喜多村緑郎
山本俊作……井上正夫

下
俊作の娘君子……柳花章太郎
坂崎精二……伊志井寛

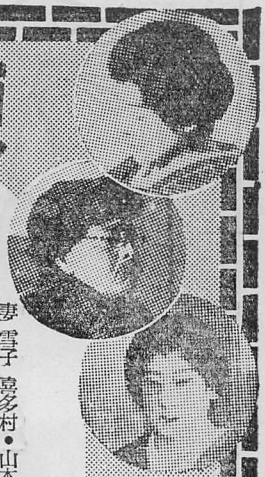
「二人妻」

俊作の妻悦子……河合武雄

「婦系圖」

お蔦……花柳章太郎

東京大新派總動員



第三 一人妻 五場

一人の男に第一の妻と　第二の妻があります　そして　その
どちらにも　子供があります　男は滿州で第二の妻とその子供
達と暮してゐます　第一の妻の家庭は東京です　子供達は父を
慕ひます　男にとっては　どちらも可愛い我が子です　これで
悲劇が生れずには居りません　果して　皆様は　誰に最も御同
情なさいますか？　井上　喜多村　河合　花柳等の巨頭總出演
の大舞台です

妻　雪子　喜多村・山本俊策　井上・妻　悅子　河合

毎日四時開幕　◇初日二日目三時開幕

十月一日初日
各等割引値段

日曜祭日マチネー

◇午前十一時半開幕◇

婦人系　二幕　五場
妻　圖　七場

◇マチネー劇料◇
壹等・二円二十錢
貳等・一円二十錢
參等・七十錢
菊・五十錢◇桝・三十錢

第一　十二番の聖歌　八場

第二　仇吉と米八　八場

第四　婦系圖　五幕　七場

御町内の運動會と從業員の方の慰安會は……もつと　手數のかからぬしかも充分御滿足して頂ける觀覽會をおすゝめ致します

壹等席は五日前より、貳等より櫻までは前日より發賣致します

前賣團体割引値段（戎）
櫻・三十五錢
菊・五十錢
壹等・二円八十錢
貳等・一円二十錢
參等・七十錢

電話　八八三
専用　六八

初日割引値段

歌舞伎座

喜多村　緑郎　伊志井寛　雪岡　南光　若井廣一郎　藤井信一郎　藤間昇　吉岡波正　菊之助　英太郎

藤村秀夫　白河式部　高梨青峰　藤園倭堂　池内勝英　若宮靖峰　伊井友三郎　河合武雄

大矢市次郎　河合明石　吉永豐次郎　市川紅梅　森戸赫子　柳木操子　花柳章太郎　花柳はる喜

日出夫改め　井上正夫　大瀬東一城　花和鬼英　寺島幸一　松下榮一　渡邊誠　川島一郎　柳村峰雄　柳田永二郎

小道具・小裂

貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多少に不拘御用利下
さいご御來客の御相談に應じ便利よく
お取計ひ致します……

松竹衣裳部

本店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル內
電話　戎五六三四番
東京支店　東京市淺草區駒形町二十三番地
電話　淺草六六六一番

十三日初日
中座新國劇

「關の彌太ッペ」

關の彌太郎……島田正吾

下 島田の彌太郎
辰己の箱田の森介

「霧笛」

お花……長川
代官坂の富……小島
千代吉……辰己

「悲戀の白拍子」

白拍子・河原崎國太郎

前進座・浪花座

「長郎次の水清」

郎十長崎原河・長郎次

郎十長……長郎次
郎三芳……蝶お房女
門衛右翫……松石の森

門衛右翫・松石の森

長郎次の水清

『維新の女』

清岡半二郎　中田正造
宮澤吉之助　山口俊雄

『有罪無罪』

弟　力　寺田靖夫
神田文子　梅野井秀男

角座關西新派劇

『維新の女』

お町　梅野井秀男
垣村良介　都築文男

蹴手繰り音頭

阪東好太郎・飯塚敏子主演

月形龍之介特別出演

大阪毎日新聞所載

原作●長谷川伸

脚色●梶原金八

監督●井上金太郎

大内弘

澤井三郎

大崎時一郎

山路義人

新妻四郎

高松錦之助

助演

茂加下竹松

秋季特作品

愛飲家各位の御推奨は
多年の研鑽東洋第一の設備
品質の優良に基づく

アサヒビール

清涼飲料　リボンシトロン

宮内省御用達　大日本麥酒株式會社

文樂座十月興行

「繪本太功記」

「由良の湊千軒長者」

下……鄭元國務總理より文樂座へ贈られたる書

第二回溫習會
南地名妓の所作事
中座にて十月十日まで

新興キネマが全力を傾注して完成せる
菊池幽芳不朽の名作の發聲映畫化！

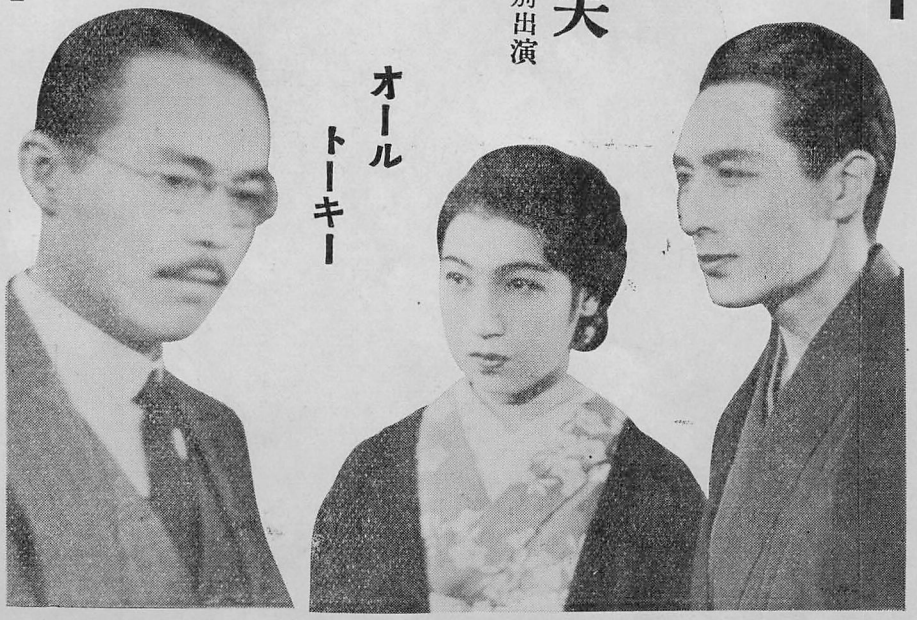
母と罪

新興秋季
超特作品

山路ふみ子主演
高田稔賛助出演
新派驍將 藤村秀夫 特別出演

菅井一郎　藤間廣一
三桝豊　浦邊粂子　助演
松平龍子　花房銀子
近衛秀子　阪東光仲

オール
トーキー



レーヴン圓形

赤い帽子に
白の制服を
着たレーム
御園クレーム
はバラの花を
想はす様な芳
香を以て心地
よくバラッシ
ュし健やかな
美しい肌を作
り上げます

ゲンシツニアヴ

ンセ五十三……型　大
ンゼ五十二……型　小
ンセ五十三…型とあぱで

伊東胡蝶園
東京・大阪

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

第十年

十月號

第百九輯

★新國劇の現在を語る★

長谷川伸

新國劇のことは、私にとつて、餘り近いので、さて、現在を語らうとすると、妙に、何もいふことが無い。

餘り、だれも云はないが、新國劇の文藝部は、私の知る限り、どの劇團にもない特色だ。

ここの文藝部は劇曲の作家と舞臺裝置家とから成る。獨逸で修業してきた樋口十一君、新國劇生へ拔といつていい小堀雄君、歌舞伎劇系の谷屋充君、純粹文學系の青木齊一郎君それに濱田右二郎君がゐる。理事の俵藤丈夫君が、これ又、脚色の技倆をもつてゐる。が、私は甚だそれを喜ばない。俵藤君は脚色の筆を執る人でなく執らせる人だからである。それに、竹田敏彦君といふ有名作家が控へてゐる。さうして、この諸君は、演出班の各員である。

かういふ文藝部を持つことは、新國劇の強さだ。これに似た小型なものは、梅澤昇劇團あるのみである。あすこには原巖君があり、濱田秀三郎君がある。この二人演出もやる。

東京公演の千秋樂の翌日、八月廿八日、明治座の新國劇試演會は異常な好成績であつた。その舞臺で、彼等の若き盟友の一人、野方直二郎君が死亡した。私は、その晩と葬儀の日のことを知つてゐる。

その晩、打出し後の樂屋で、野方君の遺骸に侍してゐる彼の先輩や盟

友が、泣いてゐる光景を、私は、新聞記者の肩を叩いて、『あすこをよく見ておいでなさい』と教へた。私が記者だつたら、確かにその晩のこの事故は　トツプに仕上げてみせたに違ひない。葬儀の日も、弔詞を讀む新國劇のものは悉く泣いてゐた。

雑漠に書いたが、私がこんな事を書いたのは、もつとも近い例を引いて、新國劇の内にもつ心を云はうとする爲だつた。これを、某々の俳優の物故前後にくらべて、暖寒の差が餘りにあることに私は深く心づいた。

新國劇は當りつゞけてゐる。それに違ひないが、天の加護は、時どき試練を下すことを忘れない。思はざるの被害を受けることはそれだ。萬全を期して撰んだ劇曲が、愚にもつかぬものとなることもそれだ。天は恩寵を垂れ、常に成功させ時に失敗させ、新國劇催立まで、彼等を内外に、砥勵しつゞけて持つて行かうとしてゐる。これを私は新國劇の神がかりといつてゐる。事實、新國劇には奇蹟が往々にしてある。

世間、往々、澤田正二郎君在世のころ、山本有三君をして、神がかりといはしめた、一種獨特の「氣」が舞臺にまだ出ないとする、が、違ふ大きに違ふ。現在の新國劇の舞臺に出てゐる「氣」は、故人の釀した「氣」とは違ふ。が、出てゐる。確に、新國劇獨特の氣が横溢してゐる。

それは熱心だといふ。そんな簡短と違ふ。上達したのだといふ。そんな冷たいのと違ふ。もつと複雑、もつと溫かい、說くことの出來ないモノ、解くことの出來ないモノである。

現在の新國劇のものは、明かに、澤田正二郎君を存在する神と信じてゐる。澤田君の舞臺技術を越ゆるものが幾人出ても、彼等が澤田君を神としてゐることに變化は絶對ない。これが新國劇の現在である。

× × × ×

× × × ×

『梅暦仇吉と米八』上演に就いて

木村富子

拙作「仇吉と米八」は昨年二月東京の明治座が初演でしたが、これは先年發表致しました拙作「十三夜」へ加筆して、二つ揃つて咲く花は、實を結んだ方が勝だといふ、大詰の仇吉の臺詞を重點として、喜多村河合兩優へ書卸したものですが、舞臺の都合で、前幕にお約束の尾花屋座敷の羽織踏みをつけ、そこでは清元と下座を用ひ、後幕の仇吉の家では小唄をつかつて、やゝ現代風に成つてゐます。

一つの狂言で二つの演出に成つた事は、無理だつた

座伎舞歌ていつに演出

井上正夫

今年の五月公演で、京都までは出かけましたが、その節病氣を押しての出演であつたゝめ、六月の大阪歌舞伎座全新派出演には休みましたので、私にとつては今年に入つて正月以來、第二回目の御目見得といふわけです。

春の病氣以來、特に身邊多事に追はれてゐますが、今それらの雜務堆積の裡にとりかこまれてゐても、旅へ出ると聞けば、はや勇躍の心がさきに立つて、忙しさを加へつゝもその日を樂しみ待つて居ります。

過ぎつる日、あの再度まで襲つた水禍の慘害を被られた、お氣毒な京阪地の方々にお逢ひして、親しく御

かとも思ひましたが、まげ物の似合ふ人たちの、洗練された藝と味とで、さしたる不調和にも見えず、又特に此の材料を愛して引受けられた深水先生が、舞臺裝置はもとより、其の意匠考案に成る　かづら、衣裳、下駄一足に至るまで、すつかり辰巳趣味を見せて下さいましたので、一寸評判に成りました。

素より斯うした情緒の世界は、演劇の中心ではなく人情本の展開といふまでですが、然し兩優の藝者者が新派のお芝居として殆ど定石と成つてゐる今日、御兩人が、すつきりと辰巳に成り切つて、あの情痴のふん圍氣中に、淡々として、複雑な戀のいきさつを演分けて見せる、洗練された藝の本領を發揮されるといふ事は、いつもほゝ笑ましい事だと思ひます。

挨拶申し上げ、その當時のお話なぞ伺つたりすることは、いたましい氣持ではありますが、その暴威に荒らされた土地に踏み耐へて、勇しく復興にいそしんでゐられる皆さんのお姿を目のあたりに視、また幸に御災厄なく御壯健にゐられる方々のお顔を見られるといふことは、何より欣ばしい次第であります。

新秋すでに「お彼岸」を迎へても、蒼空を見られず九月中實に霖雨つゞきにものみなしめりきつた東京の天地から解放されて、大阪入りをする頃には、たぶんほんたうの快晴を見られることゝおもひますから早く皆さんにまみへて、青空の下でも、煤煙のそらの下でもいゝ——關西の芳香みち〳〵た松茸の香りでも賞でさせていたゞき、大いに氣分を轉換して、元氣一杯に歌舞伎座の舞臺をつとめたいとおもつてをります。

また、今度はうれしいことにいつもの晝夜二部制からも解放されて、土曜、日曜、祭日の他は一回興行とのことですから、暇々にはおなじみの中之島、天王寺あたりへも出かけ、文子(愛犬)を相手に「球なげ」に興じ、よきバッテリーぶりを發揮して、朗かな秋にひたりたいものと希つて居ります。(九月廿四日稿)

―劇團を語る―

關西新派　菱田正男
關西新派　高谷伸
東京新派　大橋孝一郎
前進座　氏川溯江

關西新派よ健闘せよ

菱田正男

旗擧げ以來約二年に近く、大阪角座に立て籠り、道頓堀の人氣を席捲した〝關西新派〟は劇界近來の記錄破りとして好劇家の眼を瞠らせ、今なほ健闘をつゞけてゐることは全く偉なりと謂はねばなるまい。

しかも盛夏八月、はじめて京都南座に現はれ、偶々あの祝融子に見舞はれたが、反つて世に謂ふ「燒け肥り」の譬に洩れず、すばらしい好成績をあげて、威風堂々といひたいやうな元氣で大阪へ引きあげたのにはわれ〳〵はいささか呆れ氣味だつた。

何故かといへば、由來京都は珍らし物食ひの土地である。前に、東京松竹少女歌劇の來た時でもわかるがその京都だつて都築、山口、中田、宮村、進藤、畑といつた、成美團や、新聲劇、享樂列車、淡海劇などで相當以上の馴染のある連中ばかりに、たとへ梅野井、瀧兩君の初お目見得の宣傳を利かせたつて、この暑い

のに來るものかと多寡をくくり、ちよつと飛びつくまいと思つてゐたのに、そこがその變態趣味とでもいふか、京都人の氣持が吸ひつけられてか、どこかのよさに共鳴したものと見え、とにかく夏枯れ時にあれだけの成績をあげたのだから「關西新派の魅力も案外馬鹿にならぬ」と驚ろいたのである。

もとより京都にデビユウした俳優諸君も、相當京都人と親しんでゐた古强者も、ひとしく最眞の勸誘に寧日なかつたらうが、何にしても大入をつゞけてゐたことは否めぬ事實であり、京都における大きな足跡――すなはち今後の再來、再々來の時への大きな約束づけをしたことは大手柄と謂へやう。

甞ては新派でも、歌舞伎でも、關西がリードしてゐた。その誇りある關西が最近の如く歌舞伎でも、新派でも、新劇でも萎微不振を極めつゝあることは全く驚ろくべきものがある。

これが原因としてあげられるものは數々あるが、その詮索はさておいて、歌舞伎は、俳優、劇場などに於て既に東都に完全に壓倒されてゐるが、新派などもつと伸びられはせぬかと思ふ。河合、喜多村、井上、花柳の四巨頭を中心にガッチリ組んでゐる東京新派には到底及ばぬなどゝ悲觀すべきでない。『都築、山口、中田、梅野井の四巨頭こゝに在り』といつた意氣はつねに忘れてはならない。地位、技倆の比較に拘泥して、徒らに諦めを强ひるのはあまりにも意氣地がない。曩頃白井松竹會長も「關西新派をもつと盛んにする」と明言あつたと聞く、このよき指導者を得て關西新派は更にもつと頑張るべきである。

だが茲に特に聲を大にして言ひたいことは〃脚本〃である。いくら此の劇團の人々が健闘したくとも脚本が拙劣杜撰極まるものであつたなら見物の來ないこと請合である。劇壇をあげて脚本難の叫び高い折柄良作品を得ることは至難であらうが、場合によつては東京新派のそれのやうに新派の古典物の再演も面白からうし、或ひはその新釋もよいと思ふ。とにかく脚本の選擇には充分心してほしい。と、同時に俳優個々の立場や、連中制度乃至は他の劇團にあり勝な幹部偏重の通弊を除去して、新進のため、幹部のため、それ〴〵に良材を與へて大いに働かせることも肝要である。徒らに幹部偏重の弊に流れて切角の新進養成錬磨の機を逸

せぬやう心がけてほしいと思ふ。

恰も十月は大阪歌舞伎座に東京新派が總動員で上演するが、この機に相對抗して好成績をあげるべく大いに努力すべきである。

關西新派よ　更に健闘せよ！　（十、九、廿五）

關西新派の人々

高谷　伸

もう滿二年に近くなる。角座に立て籠つてゐる關西新派にはいろ〳〵の異色のある人々が集つてゐるが、考へてみると生え抜きの新派人といつては都築文男ぐらゐでたいていは新劇出の人々である。

勿論新劇から直接新派に轉じた人々はすくなく前期新劇の人は一度は劍劇といふ道を經由してゐる。

都築の新派生活は久しいもので幹部昇進は明治の末だつたと思ふ。その頃の演藝倶樂部に新幹部として載つてゐた寫眞が今だに目に殘る。色敵から二枚目、成美團での活躍も忘れない。今ではその他に老け役をを り〳〵やるが達者に任せてちよいと匂ふ臭味が出るにしても確かなものだ。一昨年東京新派へ入りかけて席次のことで憤然として歸西したとの噂もあり、とにかくこの一座での座頭役者である。

梅野井秀男も新派らしい人である。その出現は慧星的であつたがあの達者と熱演と特異な女性的器用さで東京劇壇を驚かせ昨年の大阪入りとなつたが生れは西國だと聞いてゐる。靜間小次郎が話してゐたが『何でも以前熊谷武雄の一座にゐたさうですが、熊谷が旅廻りに暮らし梅野井が道頓堀で働いてゐる。彼も傑物ですよ』と、云つてゐた。九月の後半も雪之丞と、藝妓濱勇とで殆んど大半を主役で押してゐる。かしくなども巧かつたのは、本人がのめる口だからではない。やはり達者な腕があるからで、女優の多いこの一座で立派に立女形でやつてゐるのも目に立つ。

山口俊雄も純粹の新派人なのだが長らく奮鬪を共にしてゐた新聲劇の人々が藝術座出の人が多かつたし第一劇場などの關係から新劇出の感がある。すこし癖はあるがきび〳〵した殺陣と現代劇への努力とでこの座の立派な書出し役者である。

中田正造は藝術座以來あの重厚なせりふ廻しで押してきたが、前期新聲劇「すわらじ劇團」「享樂列車」などでかなり苦勞をつゞけてきた。近年「ガラマサどん」「寢ながら綺譚」などで喜劇的方面に肥滿した體軀を利用してゐるが、經歷の割にめぐまれぬのは小手さきの藝をやらぬからでもあらう。

畑穰も藝術座以來の人で新劇だけでなく璃德の實盛につきあつたり彌次喜多をやつたり、淡海の喜劇にまで出てゐたが、この座では天一坊の越前守などが當り役であらう。愉快な人物だがそれが舞臺で發揮せぬだけ損な立場にある。

進藤英太郎は第一劇場時代大いに囑望して當時の映畫と演藝誌上で推賞したこともあつた。時代物より現代物の方を買ふが、この頃のやうに老け役專門では氣の毒だ。氣の毒といへば笈川武夫だ。築地系の新劇人だが、汐見洋が一と月きりで東京へ去つてから何だか外樣大名の感であまり役がつかぬがをりをり持ち味の美點が見える。吉田正雄も腕のある割に不遇だ。それらに較べて格は一段落ちるが芽を出したのは三枚目の市川光信だ。新興座にゐたさうだがこの座で與多者とお月樣から拾ひ上げられた。二枚目の山村聰も去年はじめて舞臺に接したのだが、何だか納まりかへつた風に見えるのが氣になる。寧ろ二枚目でない役によい味がある。

女優では問題の瀧蓮子だ。フラツパーをやる人のない關西では斷然光つてゐるし、元來器用だから地味な役もこなせないことはない。半玉などはかなりつらいが、颱風一過して明朗な時は大いによいところのある人である。

女らしい男の梅野井に對し、男らしいまでにテキパキした宮村松江がある。新聲劇の國定忠次の妻で出來るなと思つて以來、いろんな役を見てゐる。天明陣の勘介といふ男役から何かの阿呆の娘までやつたのだから藝の範圍の廣いことは一番で、姐御風の役もやれば、色氣のある役もできる。明朗な性格だから色氣ぬ

きで面白い氣象だ。この達者さは認めてよい。

六條奈美子はやさしいやうなきざなやうな柔いやうな理窟つぽいやうなちよつと判斷がむづかしい。新らしがらずにぢつくりやればいいのかも知れない。若葉蘭子の娘役のしほらしさもよいのだが、これも新らしがらない方がよささうだ。その方面ではやはり瀧だ。澤井光世の名も久しいものだし、河村美代子は雪洲の一座で一度見たきりこの一座へ入つてはまだ日が淺いので、古いのと新らしいのとの二人は失禮して關西新派の人々の瞥見記の筆を閣く。

東京新派あれこれ

大橋孝一郎

この前東上した折のこと、銀座のさる喫茶店で休んでゐると二人の夫人が十七八の少年と連れだつて這入つて來られた。その時居合せた僕の友人は、かねがね俳優の內幕なぞに精通してゐると自稱してゐる男だつたので、すぐとその人々を一人の方は河合武雄氏の夫人であり、もう一人は氏の第二夫人、少年は即ち息子さんであると僕に敎へた。この友人の言葉が出鱈目なれば、河合氏に重々相濟まぬ次第なのであるが、此の言葉を信ずる以上に於て、この第二夫人を觀察すに、僕には大變興味の深いものがあつたのであつた。と云ふのは、第二夫人が、河合武雄氏自身が舞臺で扮するところの女性のタイプなり感じなりと甚だ似通つてゐると云ふことなのであつた。このことは云ひ換へれば河合氏の好きなタイプの女性と云ふのは、即ち、氏が舞臺で扮するあのタイプの女性であり、その好きな女性のタイプを河合氏は舞臺で樂んで演じてゐるのだと云ふことになる譯であらう。これは僕には大變興味をひかれた點であつた。又次の樣なことも考へられないこともなからう。例へば河合氏が舞臺で演ずる一擧一動の何處かに、此の實在してゐる女性の動きの一部分でも現れてゐやすまいか。尤もこれは眞とに小說的な

推意ではあるけれども……。若しそうだつたら、河合氏の舞臺藝術の爲にこれも立派な内助の功と云つて差支へのない譯ではないか。

河合氏個人のことばかり書いて終つたので、筆を轉向させやう。河合と喜多村、申すまでもなく新派の双璧だ。そして僕は此の二人は歌舞伎に於ける菊五郎と左團次の持味に何處か一脈相通じた性格を持つてゐる樣に思へて仕方がないのである。即ち華麗で絢爛な菊五郎を河合と結びつけ、端麗で素朴な左團次を喜多村と結びつけてみるとき、此處に何か共通點のあることを僕は感ずるのだ。そして一たび舞臺に於て此の二人の相反した個性の融合したときこそ、此の劇團特有の匂ひと彩りがあまねく觀客席の隅々にまで立罩めて行くのではないだらうか。藝では充分卒業して終つた二人が、近頃では專ら花柳を第一線に活躍させて、自分達は第二線に身を退けて樂しく花柳の活躍振りを見つめてゐるかのやうな態度のほの見えるのも奥床かしいことだ。

新派は新らしい脚本に依つて見ちがへる樣に甦つて潑溂となつた。先月の東劇なぞ中々野心的な番組の配列だつた。新派らしくない新派。これからの新派のお客の要求してゐる脚本はそうである。例へば此の月かゝつてゐる「二人妻」なぞその格好のものと云つてよからう。正面から眞面目に取扱つて行けば、從來ほとんど使ひ古された家庭悲劇として終るべき題材を捉へて新らしい話術と、省略法とで描いて行く……新派らしくない新派。全ては脚本が支配して行くのである。良い脚本のある以上、全ての演劇は安全だ(九月廿八日)

前進座を語る

氏川溯江

本年に入つて三度目の公演、前進座の地盤も愈々強固になつてきた事だらう。然るに今度はお隣りの中座に又しても强敵新國劇が中旬から競演の陣を構え、加ふるに歌舞伎座にはこれも大敵東京大新派が聯合軍を

組織して堅壘を築いてゐる。今度は仲々の苦戰だ。加ふるに新派も新國劇も今度の演し物は何れ劣らぬ名作揃ひ、うかうかしてゐたら辛らい目を見なければならぬ。頑張れ々々前進座。

前進座の人達が口癖に云つてゐる、私達は何時になつても偉らい役者にはならないと云ふ事は若者らしい愛すべき稚氣である。偉らい役者になつて收まり返るやうな時節がもしあつたなら、この言葉をとつて以つて戒めてやらねばならぬ。

今の前進座の人達に向つて私は決して完成された演技を望もうとは思はない。何でも彼でも演りたいと思ふものをドン〳〵やつてみる事だ。と云つた所で見物の鼻息許り伺ふてつまらない物を一生懸命に熱演するのは無駄な事だと思ふ。從來時稀まに煙草一服と云つたやうな安易な態度の演し物が無くもなかつたのでこの機會に一言しておく次第である。

前進座で誰が比較的一番巧いかと云へば私は翫右衛門だと答へる。彼氏三十五才恐らく前進座員の中では藝歴から云つても年齢から云つても先輩格であらう。脚本も書けば演出もやる。議論もやれば踊りも幾らか手心がある。まことに器用な人である。何つちかと云へば世話物畑の人で、殊に長谷川伸氏の三尺物をやらせては或は新國劇の島田以上にうまひかも知れない。前進座としては長十郎を表看板にしてこの人の才智で兩々相まつて發展して行くべき好個のワキ役者とも云へやう。翫右衛門をワキ師とすれば當然長十郎がシテである。前者の線の細さに對しこの人の線の太さ、鋭角に對する鈍角、總てが對蹠的である點が誂へ向きのデウエットと云へやう。前者が世話物役者であるに對しこの人は時代物畑の尤であるのも當然である。前者の素迅つこ過ぎるに對し、この人はやゝ鈍重と思はれる位間が伸びて粘の強い點がある。新らしい物では左團次畑の繼承者として、又古い所では南北物の世界に多くの未墾地が殘されてゐる。歳は翫右衛門より一つ下で三十四才である。

次は若冠よく前進座の人氣を背負つて立つ唯一の女

形國太郎である。家柄を何よりも姦しく云ふ芝居道では異端扱ひの素人出で、しかも名家河原崎國太郎の名を嗣ぐ事さへ既に珍らしい。彼氏年齒僅かに二十七才一見左程才走つた所も無いのに演る程の役所悉が不思議に人々の注意を惹きつけて止まない。純粹の女形役者としては秀調逝つた後只一人松蔦が現役で氣を吐いてゐる今日、我が國太郎の存在とこれを擁する前進座の强味は格別なものがある。

その昔關西青年歌舞伎華やかなりし頃美しい女形として印象に殘つてゐる中村龜松が今の鶴藏だと云つたら誰しも一寸意外な氣がするだらう。今では三枚目で鳴らしてゐるが、仲々何うして、腕の達者な事は知る人ぞ知る。何となく曲者と云つた感じのダークホース中村鶴藏、然し惜しい事には病氣勝ちで存分の手腕をみせて貰ふ機會の尠いのは殘念である。

以上四人は前進座の代表者として一とわたりスナップショットを示したに止り、この外にまだ〳〵書きたい人々もあるが又の機會に讓る事とする。

ともかく今月は苦戰かも知れぬ。再び叫ぶ、頑張れ〳〵、前進座。

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品

國產金鶴印

ウキスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ペパーミント
滋養葡萄酒

元賣發

株式會社 横山商店

大阪市東區豐後町三番地

電話東(94)一六六一 二〇一三 四六四九

誌上舞臺

關の彌太ッペ

三幕六場

長谷川　伸作

中座新國劇上演

甲州桂川の磧

甲州街道吉野の下を流れる桂川の磧の朝まだき。村の人達が四ツ手を下ろして魚を取つて居ります。と、つい此の邊りでは見かけぬ風體の、博徒姿の旅人が通りかゝつて、「今こゝへ小さな女の子を連れた男が通りかゝりはしなかつたか」と、尋れて行き過ぎました。人々が此の不思議な男の後ろ姿を見送つて居りますと、そこへヒョッコリ現はれたのはつい今し方尋れて居た親と子でした

「此の宿に澤井屋と云ふ旅宿は有りませんか？」そう云つて尋ねる樣子には、何か深い仔細があるらしいのでした。村の人達は十何年前かに突然姿を隱した澤井屋の娘おすみに關聯した事だらうなどゝ噂をします人々が去つた後、旅の男は手紙を認めてそれを連れてゐた娘に持たせ、澤井屋へとゞけさせて自分は其場から姿を隱さうとします。

其處へ戻つて來たのが以前の旅人、關の彌太郎です。昨夜前の宿で五十兩の金を盜んだ曲者、それが此の子の親だつたのです。彌太郎はいきなり斬つてかゝつて奪ひ返さうとしますが、もうすつかり觀念した和吉（娘の父親）は、どうか娘の居る前でそんな事を云つて呉れるなと頼みますので、彌太郎も暫く待つてやります。そして子供の去つた後で二人は脇差を拔いて爭ひますが、結局勝は彌太郎でした。「どうか娘を頼む」それが和吉の口からもらされた、最後の言葉でした。

吉野宿澤井屋の店先

おすみの行方が知れなくなつてから十何年。澤井屋も今では息子に嫁を貰つて無事に暮しを立てゝは居りますが、どうしても忘れ兼るのは、娘おすみの事でした。今日も通りがゝの易者に生死を觀て貰つてゐますと、突然見馴れぬ旅にんが小さな女の子を連れて來て貰つて呉れと云ひますが、いくら娘に似てゐるとは云へ、素性の知れぬ人から子供を預る譯には行かぬと斷はるのでした。すると旅にんは、「そんなら向十年間、年三兩の食扶持で預つて呉れ、その他の入費くるめて二十兩、メて五十兩前金に出すから、もし娘が成人したら誰れでも好きな男に添はしてくれ。この子の男親は泉州堺の人で、名は和吉」そう云つたまゝ何處とも無く姿を消して了ふのでした。後に殘つた娘は、「小父さん〳〵」と後を慕ひますが、澤井屋親子がなだめすかして名を聞くと、これぞ娘おすみの遺兒であつたのです。おすみの死んだ事を聞いて、一家の人は今更のやうに涙するのでした。

下總菰敷ケ原

笹川の繁藏の身内、清瀧の佐吉の處へ草鞋を脱いだ箱田の森介、同じ身内の勢力の留五郎の食客になつてゐる關の彌太郎は、共にさゝいないきさつから喧嘩仲。或日森介から果し狀が來たので彌太郎は此機を外さずバラして了はうと菰敷ケ原へ出會つて斬り結びます此の有樣を佐吉と留五郎は物蔭から默つて見てゐると折柄通りかゝつた笹川の繁藏が仲裁に入つて、二人を仲直りをさせます。飯岡助五郎の子分神樂獅子の大八は、折もあらば繁藏をバラさうとつけ狙ふうち、子分の注進に依つて子分豆鐵、半コ、又吉、辰五郎を連れて出かけると仲裁がすんだ所なので、ボンヤリ見送るばかりです。

銚子大網樓の座敷

大網樓へ上つて一杯飲んでゐるのは彌太郎と森介と、そして其の半生を旅人として送つた田毎の才兵衛の三人です。四方八方の物語りの末、才兵衛の口から語られたのは甲州街道吉野宿の旅宿屋の娘お小夜のことでした。「稀に見る美人で、降る程の緣談を斷つてゐるその譯は、お小夜が子供の時助けられた男の顏に、見ぬ戀を感じて閾へに閾へ乍ら、しきりにその男を探してゐる」と云ふ事なのです。そして彌太郎に若し心當りがあつたなら、是非吉野宿へよつて呉れと賴みます。此時「喧嘩だッ」と云ふ叫び聲と共に多胡の赤太郎が逃げ込んで來るので、奥へかくまつてやりますと直ぐ後から、飯岡方の大八が子分八木の又吉の敵だと云つて斬りこんで來ます。遂に彌太郎、森介對飯岡方の大亂鬪となり、此時赤太郎が又引返して來て、遂に斬り死にして了ひます。

二人が引き揚げやうとする時、ドッと喚聲が起つて飯岡方が雲霞の如く殺到します。

澤井屋の離れ座敷

娘お小夜を助けたと名乘る旅にんの樣子がどうも怪しいので、女主人が不審に思つて話してゐると近所の茶店の爺さんがアタフタと駈けつけて、今、「向ふ疵のある旅にんが店へ來て、いろ〳〵お前さんの家の話を聞くので一寸知らせに來た」と云ひます。續いて入つて來たのは關の彌太郎です。彌太郎は主人に向ひ「婿が定まつたと云ふが、それはお小夜の好きな人か、それとも嫌々ながら一緒にならなきやいけないのか、それなら私に云ひ分がある。それはそうとお小夜に一ト目逢はしてくれ」との言葉に、主人は娘を引き合せますが更に娘は覺えはないのです。此時奥から出て來たのは森介でした。奸策を發かれた森介と發いた彌太郎とは、又元の他人になつて最後の爭ひをする事になりました。

桂川べり

遙か後ろに桂川の流れを望んで森介と彌太郎とは睨み合つてゐます。

お小夜は森介を飽くまで恩人と思ひ込み、ひたすらに其無事を祈つて居ましたが、此の頃より暗雲頻りに去來し聽て沛然と降り來る大雨の中に、亂鬪は續いて結局、お小夜は眞の恩人彌太郎の腕にしつかりと抱かれたのでした。

關西に生れた
唯一の脚本雜誌
新劇壇
第四號發賣中

相手役

久松喜世子

相手役と申せば直ぐそれは亭主役の様に聞えますが、現在の私にはその相手役が御座ゐません。強ひてそれを語らうとするには餘りに遠い過去の思ひ出、そして悲しい淋しい涙ばかり……。

現在の私は島田、辰己を始め血氣の若者達を愛兒として、舞臺の上に、私生活に、母の役にのみ生きる私、息子達や娘達に取りかこまれて、この人々の成長を樂しみ、祈る、母の心で御座ゐます。

白井社長の上海行き

三日雨の神戸出帆

白井松次郎會長が上海行を發表し三日午前十一時、雨に煙る第一突堤より上海丸第一二八五號船室の客となり出帆したが、如何に内緒の旅とはいへ、流石は白井氏の初の船旅とあつて白井信太郎專務夫妻令息令孃を始め松竹新興社員百數十名の見送りがあり、この上海行に就き甲板に於て白井氏は、

「私の上海行は單に小閑を得たので、云はゞ息拔きの旅行です。將來歐米各國を歴遊したいのですが、先づその瀬踏みと云つていゝでせう。何？目的があるだらうつて……。そりや演劇映畫の視察を充分行なつて來ます。いゝ土産があれば連れて來るつもりです……」

と言外に何か大きい收獲をもたらすが如く語つた。

繁華街に近く……交通至便●閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

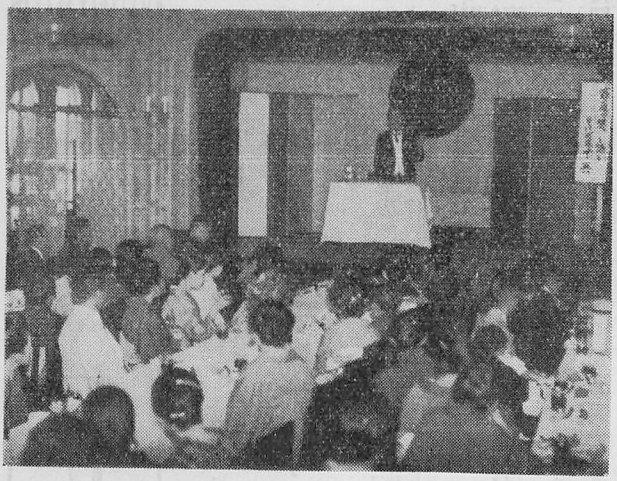
電話南四一四・四四一番

—宿—

額 三圓
半 二圓
憩 半 一

『十吾と笑を語る會』

家庭劇の總帥十吾を中心に「笑を語る會」が九月十七日丸萬五階ホールで催された。これはホンの試みとしたものにも關らず集られた人々は十吾ファンをはじめ家庭劇ビイキの婦人を主にして約一百名、素晴らしい盛況。



定刻前に天外、元安、山田、高田石河、東、春日、村田、浪花等の花形軍に、多田營業部長、山上舞臺監督、鳥江宣傳部長、十吾氏が出席したが、樂屋裏で、十吾氏參會者に素顏を曝すが恥しいと洋服の袖を帽にする事しばし、

會の次第は左の順序で始めらた

一、司會(高田君)

一、挨拶(山上氏)

一、大阪の家庭を語る(鳥江氏)

一、妻を語る(元安氏)但しノロケの様なノロケでなかつた様な話

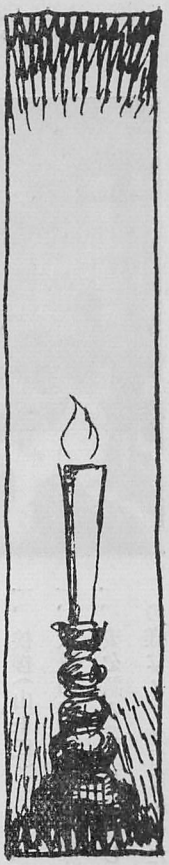
一、笑の流線型(山田氏) 何だ彼だとかやく飯の様なお話だつたです。

一、挨拶(石河、東) 兩スターの爲に、天外クンが花恥しげにマスターオブセリモニー代辯を勤めたです。

一、親を語る(高田氏) 親孝行に就いて――一同謹んで拜聽したといふことにしておきませう。

一、家庭の笑ひを語る(十吾氏) 輕妙な身振りで漫談一席

他に來會者の林家染丸師が婦人向きの「落語」一席、帝塚山學院長庄野氏が、ユーモアたつぷりに家庭劇は娘子供に見せていい唯一の芝居だと禮讃を一くさり、續いて天外クンが「ハツトン婆さん」(上演脚本)を朗讀し、來會の婦人方を泣かせたり、笑はせたり、和氣靄々裡に四時意義ある「笑ひの會」を閉ぢた。(村上記)



前進座フアン記

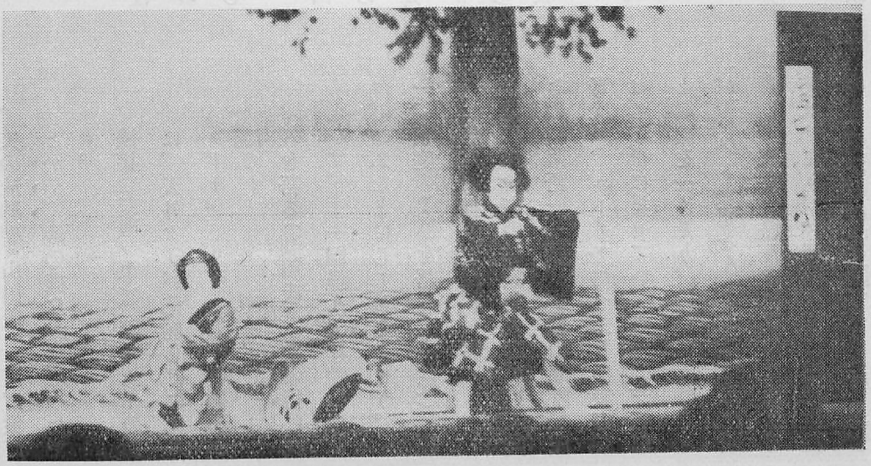
姉小路　孝

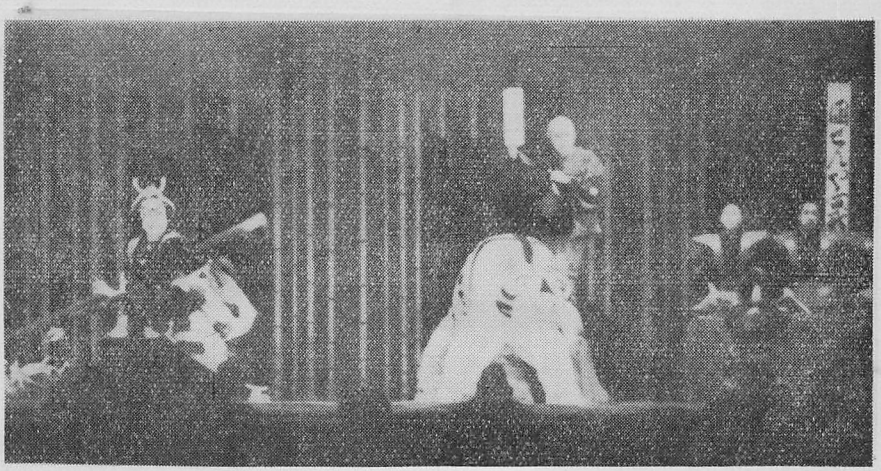
前進座の第一の強味は他の劇團や一座では一寸眞似られない樣な番組が組める點にあるのだと思ふ。例へば古劇の復活上演がそうである。或ひは新らしい脚本の上演である。かう云つた興行的には冒險な仕事にグン〳〵鍬を入れて行ける處に此の劇團の強味があるのではないか。

次いで一座の團結力の根強さである。最近確聞したところによると、一座の仕入れが近頃は中々お高くなつたと云ふことだ。

これは今迄の一座の忍苦精勵に依る團結力の賜でなくてなんであらうか。

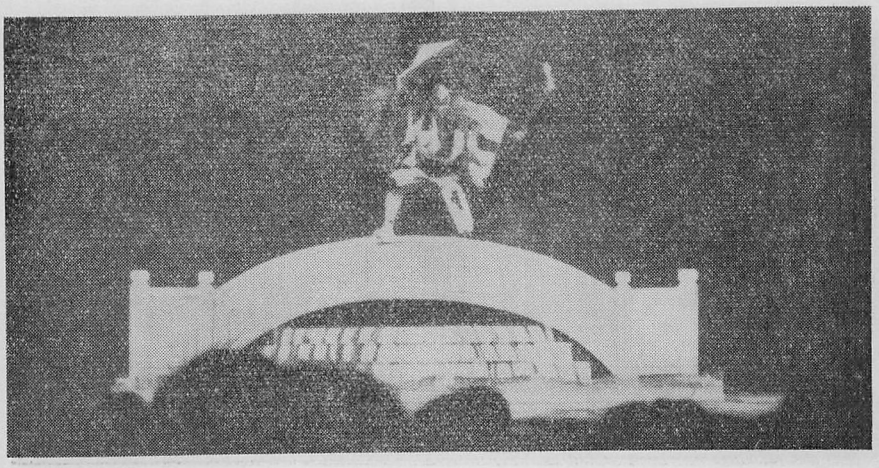
熱と意氣。これも此の劇團の賣物になつてゐるが、事實現存する劇團の内で此の劇團ほど東奔西走して活躍してゐる劇團は稀れである。されば、今では實にあなどり難い多數の前進座フアンを各地に獲得するに至つたが、これは全く此の劇團の燃えさかる熱と意氣に魅了されて終つたに外ならない。





今月の浪花座は此の劇團第幾回目かの道頓堀進出で氣焔を擧げてゐるのは結構だが、近頃トント古劇のマトまつた復活上演を見せて呉れないのは、それが此の一座の呼び物の一つとされてゐるだけに物足りなさを感じないものでもない。僕達はまだ「龜山の仇討や」「お染の七役」で見せて呉れたあの面白さや妖麗さは忘られずに醉ツぱらつてゐるのである。僕達のこの歌舞伎の幻境をジツと保つてゐて呉れることは、確かに前進座の責任である様な氣持がするのだ。東京で評判になつた一座の當り狂言「一寸德兵衛」なぞ是非此の月あたりは出して貰ひたいものだつた。僕がこの三月に演舞場で見た「國性爺合戰」なぞも結構だ。これは渥美清太郎氏の改作になる五幕十二場の長篇だが鳴蛤から虎退治、紅流しをへて奥殿あたりまで關西でも上演して頂きたい。これも此の次の日の宿題として、前進座企畫部の方にお願ひして置かう。（掲載寫眞は國性爺合戰鳴蛤より奥殿まで――筆者撮影）但し、何時かの「廻船噺」の樣に何が何だか判らないのようまで省略しての上演はお斷り申し上げる。あれなら「だんまり」程度で充分だ。

國太郎に男裝をさした「綠の地平線」や映畫で馴染みを付けた「清水次郎長」も結構だが、かゝる當場りを狙つた脚本の上演は半面一寸淋しい氣がするのだ。尤も商賣々々には相違なからうがそれはまた他の劇團に委せて置いて、矢張り歌舞伎味を强調した特色ある行き方で進んでほしいと思ふのである。その點同じ新作でも何時かの「室町御所」の樣に



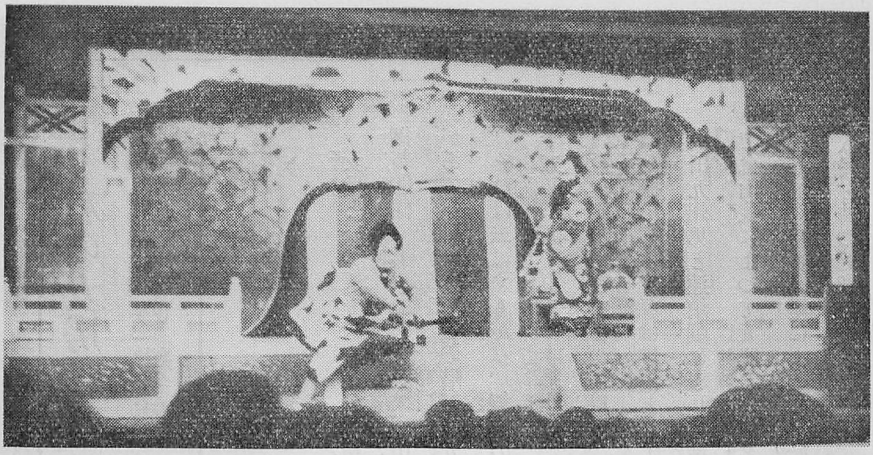
何か此の劇團の野心がほの見えるものは歡迎しやう。又先刻古劇復活の希望を述べたが、あながち珍らしい出しものに限つた譯ではない。例へば、長十郎の松王に翫右衛門の源藏で「寺小屋」なぞも面白からう。長十郎の左團次ばりでの「大杯」も樂しめやう。とこんな風に考へて來ると、場當り的な脚本を上演して道草を喰つてゐる時間がなほのこと惜まれてならないのである。

又、前進座は近頃は映畫界にも乘り出して來た。實に拔け目がない。僕は最初此の一座が映畫を撮ると聞いた時、非常に期待をしたのだつたが、撮る映畫が「清水次郎長」だと聞かされた時はゲツソリとした。何故此の劇團の特色を發揮すべき脚本を選定しないのかに不審を抱いたのであつた。(それに、あの勝太郎の主

次郎長漫傳　大槻たもつ

(1)

次郎長「アレッ變な愁波、それも仁義の中の一手かれ?」　石松「へへ…當世流行の丹下左膳張りで、恐れいりやす。」



題歌が這入るに至つてはであつた。）しかし、第二回の作品「街の入墨者」はこんなではない筈だ。監督は今をときめく山中貞雄だ。と餘り此の映畫の宣傳をすると此の雜誌さんから叱られるからよすが第三回の作品には映評家連にも充分食指は動いてゐる樣子であるから安心して可なり。殊に注目すべきは河原崎國太郎が女形として此の映畫に出演してゐることである。この女形を監督がどんな風に取扱つてゐるであらうかに僕の第一の好奇心は動いてゐる。

扨、前進座の人々よ。此の夏曾て未だ一度も公演しない京都の、さる映畫館で舞臺挨拶をした折のこと、大向ふの一隅から「山崎屋」「成駒屋」と聲援をしてゐた前進座ファンを失望させない樣に頑張つて立派な仕事を殘して行つて呉れ給へ。

(2)

清水港にや鬼よりこはい大政小政の聲がする。聲はすれども姿が見えぬホンニ小政は何處にやら。「ヤイツ見えネーカ。」

私の女房役と劇團の變轉（1）

都築文男

女房といつても夫人とか、奥さん、マダム、御内儀御新造様、妻、家内、嬶ア、山の神とさま〳〵の呼稱があるが私は其總ての階級の女房をもつた。

それは云はずもがな、舞臺の上の妻である。明治四十五年三月、東京の本郷座で、幹部披露をして役らしい役をするやうになつて以來、京都の明治座に靜間一派を振出しに、私は俳優としての籍を關西に置いた。山田九州男と連鎖劇を起して地方を巡業したが、都會では山長によつて元祖といふ名をなさしめたので、中絶して神戸多聞座によつて、始めて自分の一座といふものを持つた。御歳正に三十二歳だつた。故伊井容峰先生は廿六歳で始めて座長となつて最後まで其格式を失はなかつたといふが、僕の座長は約半ケ年で、大正四年に第二次成美團（始めて土間を椅子制度にした時）の旗擧に參加した。

三等大衆席が十五錢といふ破格の安價なので、見物は押すな々々の勢ひで、晝夜の入替えには戎橋橋畔で切符を賣るといふ狀態でした。それは成美團計りでなく、山長、澤正も同樣人氣はいやが上にも沸騰したものだ。

其當時出雲屋のまむしが一つ十五錢だつたので、三十錢あるとまむしを喰べて、芝居が見られると云ふ實に夢の樣な時代だつた。

私は元來、二枚目役は大嫌ひだつたのだが、秋月先生が亡くなられた後に、關西には二枚目役者がなかつたので、やむを不得、色男役に廻されてしまつたのだ。餘談に渉るが、今月の歌舞伎座の東京新派で上演中の泉鏡花氏の婦系圖の書卸しが明治四十四年のたしか三月だつたと思ひます。東京の新富座で初演になつ

たもので、其當時の一座は伊井の主税、喜多村のおつた、先代村田正雄の酒井先生と高野英臣、深澤恒造の道學者、故福島清のめの惣、木村操の妙子、遂先般死亡された坂東秀調丈の柳ばしの小芳と二役の高野管子に、私は高野英吉に、スリの万吉が坂東一鶴といふ名子役だつた。それで湯島天神境内の場は、あれは全く喜多村先生の作といつてもいゝです。其後同年の九月大阪道頓堀の中座で再演した事がある。其時に私と花園薫が高野英吉とめの惣の女房で、東京から買はれて來ました。然し其時位、適材適所の配役はありませんでした。

勿論、喜多村村田深澤は、持役の通りであつたが、小芳と管子は山田九州男、妙子が英太郎、スリの万吉が故福井彌兵衛、早瀨主税が故秋月桂太郎であつた。

（此人の早瀨は伊井先生のとは違つた、いかにも獨逸文學者らしさ、良い味があつた）其後が京都の明治座で、喜多村、靜間で一回、同じ京の南座で、喜多村、藤野秀夫で一回、東京の市村座でも本家本元の伊井喜多村のコンビで再演した。關西では私が木下八百子におつたをさせて、角座で一度演つた事がある。其時には福井彌兵衛の酒井先生、故五味國太郎のめの惣、高野國典の高野英臣などが重なる役だつた。それから、第三次、成美團の時に、喜多村のおつたに引づられながら私が本格的の早瀨を角座で演つた事があるが、湯島の境内で、例の清元、三千歳をつかふ。丁度あの時は、新町の小二三さんがあのいゝ聲で蔭で唄つてゐられた。聲色やがからむたしか雪岡と野津英一でした。迚も、喜多村がやかましいので、私は、あの場丈は、何處から出て幾足あるいて、ベンチのどの邊に腰をかけて、この唄の文句で、なゝめになるとか、立つて前へ二足、うしろへ一足、おつたの肩へ手をかけて、どうするとか、まとノートに微細に書込んで今でも大切に保存してる。梅の小枝にみくじを結ぶ、あのうしろ向きのかたちから幕切れの形は工風に工風を重ねた洗練されたもので、其度々に變るがズツト當時は手を振つて立身のまゝ、うしろ向きの背中合せが、實に良い

繪形ちで、未だに眼に殘つて居る。だから清元を語る人でも、仲々骨が折れたもんだ。小二三といふ人も感心な人だつた。兎に角開演中は、お酒は勿論だが、塩からい物まで喰べない樣に、謹しんで小屋入りし何べんもやつて、解つて居るのに、自分の控部屋で一度復習してから、チヨボ床に上るといふ誠に心がけのよい責任觀念のある人でした。從つて喜多村も仲々御きげんで終演した、此時の配役は福井のめの惣、小織の酒井先生、東の妙子、木下吉之助の小芳、高田亘の菅子武村新の高野英吉でした。是れを其まゝ神戸、京都と持ち廻つたが、何處もかしこも大入でした。其後大阪の中座で、又々御本家の伊井、喜多村で湯島を一幕丈上演した事がある。こんな譯だが婦系圖と聞くと書おろし當時からよく知つてる私としては、忘れられぬ思ひ出だ。それが近頃では花柳、梅島で、川村花菱氏脚色の婦系圖を一昨年明治座で、今度はそれが花柳、柳のコンビで演られる譯だが、川村氏の改作でも湯島丈は以前の儘で上演して之れには喜多村師が弟子花柳の爲に舞臺監督までして教授して居る。私は明治座の花柳、梅島の時にわざわざ上京して見せて貰つたが、矢張り湯島は昔の型を其儘に踏襲して居た。而し何んといつても喜多村のおつたは勿論だが、伊井の早瀨、村田正雄の酒井先生などは全く堂に入りすぎたもので、正に新派の至寶の藝といつても恐らく過言ではあるまい。

オヤ〳〵いつの間にか婦系圖論になつて來ましたが餘り長くなりすぎて、モウ書けなくなつた。次號に又（私の女房）の方をつげけてお話する事にする。

昭和十年十月一日記

次號豫告

次號には引續いて都築文男氏が興味あるものを執筆されます。

……どうか御期待下さい。……

誌上舞臺

清水の次郎長

四幕十場　平田象三郎作

浪花座　前進座上演

東海切つての顏役、駿州清水港は次郎長の家の勝手で、次郎長夫婦を始め、森の石松、大政、小政桝川の仙右衞門、法印の大五郎其他子分が車座になつて夕餐の最中。

和氣藹々として親子兄弟の如く談笑して流石世人も羨む清水一家の團欒です。今しも頓狂な一人の乾分の哥兄連中の棚卸しから、石松の艶種が次郎長親分にまで知られて、流石精悍の石松　朶まで染めて逃げ出した。

と、急に次郎長女房お蝶が、此の頃ちよい〳〵差し込む腹の痛さ談笑が破れてお蝶を奥へ寢かせる時、人目を憚つて臺所口から這つて來たのが、かね〴〵次郎長に目をかけてくれてゐる、役人保品佐四郎。

去年身延の山で、津向の文吉と武井の吃安の喧嘩の折、文吉に加勢して靈地を血に染めたは次郎長文吉と吃安はすでに遠島となつた。次郎長、當分草鞋をはけと情の内意。

此の差し金をしたのは、次郎長が以前目をかけてやつたことのある保下田の久六といふのがある。その久六が、吃安に味方して、己が妹を尾張の代官竹垣三郎右衞門の許へ妾奉公に上つてゐるのを利用して、竹垣に次郎長のことを告げて、清水の代官に達しがあり、今宵四つがお手入れと云ふ事が判つた。

役人が去つた後、四つまでに子分共に當分別れ〳〵となり女房お蝶と共に他國に出る事となつた。

そんな事とは知らぬ石松、先刻大政たちにからかはれた茶摘み娘お龍と茶畑の夜を柄にもない、ラヴシーンを演じてゐたが手先の萬太郎から、親分の一大事を聞いて戀人の手を放して、當分の別離をつげることゝなつた。

○

子分共と別れて旅に出た次郎長夫婦と石松は尾張國名古屋までやつて來た。

道々の貸元にも顏を出さず今は路用の金も盡きて、喰ふや喰はず折も折、辻堂のあたりで、お蝶が腹痛に惱んで流石の次郎長も途方に暮れた。名古屋にゐる貸元に近附きはあるが、病み患つた女房を連れて、腹を減らして頼みに來たと云はれるのが厭さに、我慢をしてゐるのだが、石松は何より空腹なのがやり切れなかつた。

折から通りかゝつたのが、小川の勝五郎と呼んで、以前、次郎長に恩になつた男。此の男も又、素寒貧の生活をしてゐるのだが、とに角自宅へと、破れ破れた我が家へ主從三人を案内した。

元よりお蝶を乘せた駕籠賃にもことを缺く仕末、駕籠賃は勝五郎得意のサイコロで片は付いたが、お蝶の藥代と、一日の飯代が心配である。佛檀や石松の帶を賣つても、追つかない。

意を決した勝五郎は、石松を連れて、保下田の久六の許へ、次郎長夫婦の窮狀を述べに出たところ久六は默つて十手をなげ出した。

次次郎長は兇狀持ちだと、恩を忘れた久六の態度に、石松はすつかり怒つてしまつて、やい久六、手前それでも人間かと、石松得意の捨て身の大喧嘩とならうとするを、勝五郎のとりなしであばれる石松を表へ連れ出した。久六の妹お由を妾にする代官竹垣三郎右衛門は奥座敷に居て、お尋ね者の次郎長が名古屋に居る事を知つた勝五郎に表へ連れだされた石松、口惜しがるところへ、深見の長兵衛が來合せ、勝五郎より事情を聞き、十両の金を見舞に與へ、次郎長夫婦は、己が家へ預かると云ふので、勝五郎、石松、喜んで歸つて見れば、哀れお蝶は次郎長の腕に抱かれて黄泉の客となつてゐた。

旅に病んで、遂に逝いたお蝶の會葬の日東海道の貸元は多數參列して、流石に清水の次郎長の德が偲ばれる。

次郎長の親類頭として挨拶に立つたのが、武さし屋周太郎、一同に厚く禮を述べ、此の席にぜひ來ればならぬ畜生があると暗に久六の不參を罵るを、次郎長は、温和しく此の會葬を濟ませたいと、一同をなだめる。

そこへ、圖々しく久六がやつて來た。

神妙に燒香は濟ましたが、飽まで不適な悪態に、周太郎始め、深見の長兵衛その他の貸元が、只は歸さぬと意氣込むる、久六は十手の威光を笠に悪口雜言。

折柄、代官の竹垣は捕手をつれて、兇狀持ちの次郎長、それをかくまつた長兵衛も同罪といふので次郎長は、自分はお尋ねもの故仕方がないが、長兵衛だけは助けてくれと、次郎長は無念の涙を押さへて縄にかゝる。

○

代官に捕へられた親分を取り返さうと、石松、勝五郎は、大政小政と共に雨の暗夜を幸ひに、宿屋をぬけ出たが、忽ち張り込んでゐた捕手に見つかつて大亂闘となつた。豪雨は溢れて堤が切れた早鐘竹ぼらの音が響く。

代官邸では、竹垣に久六が武井の吃安から屆いた三百両を手渡しする。

やがて雨の庭先きに次郎長が連れて來られ、あとから長兵衛夫婦と子供が縛られて來た。

次郎長は長兵衛夫婦が縛られてゐるので驚く、長兵衛は觀念してゐる。

竹垣は、久六に、長兵衛を成敗しろと命ずるので、久六は喜んで遂に長兵衛を無慘にる斬り殺してしまつた。

目前、此の有様を見た次郎長は遂に堪忍袋の緒を切つた。

——今日といふ今日は、もう料見も堪忍もならねえ——と、突如大厦たくつがへす地震の襲來、壞れた塀をのり越へて、石松、大政等が斬りこんで來た。

混亂と豪雨の中で竹垣、久六、用心棒等を相手に烈しい血闘が續く。

遂に首尾よく、竹垣、久六を討ち取つた次郎長とその子分。邪魔は拂つた。揃つて清水へ歸らう。

配　役

清水の次郎長……長十郎
森の石松……甄右衛門
女房お蝶……芳三郎
保下田の久六……小三郎
妾お由……國太郎
娘お瀧……山岸

姉さんがゐたらなアと石松は淋しい。此の胸の中にいつでもお蝶は生きてゐるよ、ハヽヽヽと笑ふ清水の大親分——。

仇吉と米八

上二
下卷

歌舞伎座上演

屋花屋の奥座敷

唐琴屋丹次郎を中に仇吉、米八は戀の達引から互ひに白い眼で見合ふやうになつて居りますが、仇吉は今日丹次郎を此所へ招いて、久方振りの逢瀬を樂しまうとしてゐるのです。然し丹次郎の來ようが遲いので仇吉は一人ぢり〳〵してゐるのでしたが、軈て庭づたひに忍んで來たのは丹次郎でした。仇吉は喜び迎へながら丹次郎に、是が非でも彼の二の腕に入れてある「米八命」のほりものを此場で消して呉れとせがみます。さすがに丹次郎は躊躇するのでしたが、此場合斷る譯にも行かずたう〳〵仇吉のなすがまゝにそれを消して了ひます。仇吉としてみれば、丹次郎を想ふ心は米八に優るとも劣りはないのですが、丹次郎米八の仲は仇吉よりも一足先に出來たものだけに、心がゝりでならないのでした。それで斯うしたことでもして、少しでも丹次郎から米八と云ふものを忘れさせようとするのでしたが、仇吉もこれでいくらか氣も安まるのでした。折柄丹次郎の爲にと仇吉があつらへてをいた羽織が屆いて來ますので、仇吉は自分でそれを着せかけてやりますと、何處からか〳〵小雨の音に春ながら、彌生鰹に後れじと、更けて一聲時鳥、あれと云ふ間にあけ近く、八幡鐘のきぬ〴〵に……と清元がきこえて來ます。仇吉はまるで「私達の身の上を語つてゐるやうだれ」と、丹次郎と顏見合せてホゝ笑むのでしたが、フト米八が向ふから此樣子をうかゞつてゐるのに氣付き、顏を合しては面倒と自分は奥へ去り、又丹次郎を歸すのでした。然し丹次郎は早くも米八に止められ思はず立ちすくむのでしたが、米八は羽織を見るなり引き脫がせ、憎々しげに踏みにぢるのでした。そして聞えよがしに仇吉を罵りますので、仇吉も腹に据えかれて其場に現れ、共に意地を命の辰巳藝者が、まけじと互に言ひ爭ふのでした。それを聞きつけた小糸が仲に入り、まア〳〵となだめにかゝりますが、二人はさらにゆづらうとはしません。ト、其處へ又來合せたのが仇吉の旦那古鳥左文太と言ふ武士でした。仇吉はこゝぞ敵の討ちどころと古鳥に向ひ、「あなたの爲めに拵へておいた、御紋のついた羽織をば今あの泥足で……」と、米八の事を訴へますので、是を眞にうけた左文太は怒り立ち、自分には勿論仇吉にも謝罪せよと、刀に手をかけて迫るのでした。仇吉に詫ること、それは米八には死ぬよりも口惜しいことなのです。然し肯かれば這入つた小糸にまで迷惑のかゝるのを思ひ、齒を喰ひしばつて頭を下げるのでしたが、仇吉はそれを下駄で打つのでした。餘りの仕方に米八は思はずも立ちかゝりますが、小糸に留められ、わき立つ胸をぢつと押へるのでした。

深川仲町仇吉の家

今日は丁度九月の十三夜樣です今仇吉は病の床について居りますが、その病ひの因も戀しい丹次郎と緣を切つたが爲です。あれ程思つてゐた丹次郎と、又どうして別れたのかと言へば、丹次郎も此の程長々の勘當が赦され、愈々親許へ歸ることになつたので、互の相談づくで、さうしたのですが、未だに忘られぬ思ひに悶へるのでした。然も更に惱みを增すことは、丹次郎が米八と一緒にゐることゝ、既にその身が丹次郎の胤を宿してゐることでした。仇吉としては斯くまで深い仲になつた身も、もう二度と互ひに相見ることも出來ないのかと思へば堪え難い氣持がするのでした。然し丹次郎とて矢張り彼女を思つてゐたのです。今日もお產のお守りにと擂釜樣のお守りと文とがとゞけられるのでした。仇吉はそれをみて未だに盡きぬ丹次郎の情を心から嬉しいものに思ふのでしたが、その情に引きかえ怨めしいのは母お源の仕打でした。お源は丹次郎の一件から仇吉が旦那をしくじり、又此頃では病氣の爲めに座敷にも出られず、かせぎのないのをブリ〳〵してゐるのでした。そして、今も病む仇吉を罵つた上打ち叩きまでするのでしたが、丁度呉服屋の番頭喜八が來ますので、やうやく手を止めるのでした。

此の喜八はかれてから仇吉に心を寄せてゐる男ですが、お源に鼻藥をきかして表へ出した後、親切ごかしに仇吉に言寄るのでしたが手酷く振りつけられますので、今度はこの腹いせにと、掛金を拂つてくれと迫るのでした。然し今の仇吉にはそれも出來ず、弱り果てるのでしたが、其處へ訪れたのは思ひも寄らぬ米八でした。米八は樣子を知つて、金を與へて喜八を追ひ歸して了ひます。そして改めて、今迄は互ひに氣まづい仲で居たが、もう今日限り昔のことは水に流し仲よくつき合つて行かうと心から打とけてかゝるのでした。

これは眞實の心から言つてゐるのですが、戀に負けた仇吉には、それは皆勝利者が敗殘者に情をほどこして、心で優越を感じてゐるとしか映らないのでした。その爲め最初の中は木で鼻をかんだあしらひをするのでしたが、やがてはその眞實が胸に響いて來るのでしたそして心もすつかりとけるのでしたが、是と反對に米八はフト仇吉のたゞならぬ體の樣子に氣づくと共に、今は心のへだてもとれ去つた仇吉から、今日丹次郎に手紙を貰つたと言ふことを聞かされ、むらツ〳〵と嫉妬と憎しみが胸にこみ上げて來るのでした。かうしてたつた今までとは手の裏返すよそ〳〵しい態度に變り折柄箱屋がお座敷を告げに來ますので、さつさと歸つて行くのでした。然もその座敷には丹次郎も一座すると云ふことは、仇吉にもようく分つてゐることなのです。仇吉としてみれば、決して快い氣持はしないのですが、米八は態と當てつけがましくいそ〳〵として行くのでした。

同　塀　外

空には十三夜の月がかゝつてゐます。舟に乘らうとする米八に仇吉はわざ〳〵追つて來て羽織を着せかけようとしますが、米八は態とそれを引つぱづし、仇吉には言葉もかけず舟を出させます。仇吉は口惜し氣にその後を見送りますが、丹次郎の胤を宿したのは自分の方だと、せめてそれを思つて心を慰めるのでした。その顏へ月がさびしく……。

配　役

仇　吉……喜多村
米　八……河　合
小　糸……英
丹次郎……伊　井

ケンネットン号

萬人愛好の撰良車

登錄商標

MACHINE DE LUXE KENNET CYCLE REGD. TRADE MARK GUARANTEED

國產品中の完璧

是非御愛乘を

市內特約店ニアリ

京都市三條通小橋西

株式會社　大澤商會

芝居印象記

歌舞伎座と浪花座

西尾福三郎

宣傳子の話す所によると九月の歌舞伎座は同座開場以來の大入滿員續きだとの事、按するに九月と云ふ觀劇の好季節と東西の珍らしい顔合せの上に、何れも粒の揃つた狂言を擇んだ事、猶その上に附加へやうなら連日の雨天續きで例年ならば郊外電車を滿員にする筈のお客樣がこちらへ方向を振かへたのかも知れない。何にしても魁車休演でやゝ淋しさを豫想された上方劇壇秋の陣に、近八と春琴抄の二つによつて力强い成果を見せて貰へたのは心强い。久し振りでみた延若の盛綱は從來兎角の評のあつた細部の場所も面目を新にして演出され、總體にジツクリと落着きのある舞臺を見せた。一杯道具で通した事と、註進受けを復活した事とは鴈治郎を是正した手柄として特記したい。梅玉の徵妙には一層の慈味を求めたく、壽三郎の和田と松蔦の篝火にもつと歌舞伎味があつたらこの一篇は更らに觀物であつたらう。

春琴抄は梅玉、壽三郎の新劇（新派ではない）として珍らしくみた。が折角の新劇的取扱ひも大詰物干臺の場があつた許りに興味が散漫になつてしまつ

た。この二優の谷崎物としてはお國と五平の方が傑作だと思ふ。が何れにしてもこの一篇の上場は色々の意味で關西劇壇のたゞならぬ動きを暗示したやうで頼母しい。

問題の勸進帳はあの大舞臺へ雷さへ柄の小さい猿之助を立たせる事に危惧を感じたが、果して柄だけから見ればいかにも辨慶は小さかつた。然し山椒のやうにピリツとした所のある辨慶で、頭腦の良さと氣魄の鋭さとで押しきつてしまつた。見かけは立派で人の良ささうな幸四郎の辨慶に比して、猿之助のそれは見るから腹に何か一物のありさうな不敵な落着きのあつたのはむしろ意外だつた。延若の富樫も案外サラリと控え目だつた。

その他の演し物にも觸れたいが紙數が足らない。通覽して大頭株の力演はともかくとして、若手で成太郎一人が活躍してゐるのが目についた。

浪花座は扇雀延三郎が加入して愈々往年の青年歌舞伎の盛時を現出しさうになつてきた。

呼び物の五右衛門は將に珍劇である。友市猿之助の對面もつゞら拔けも浮見堂も面白かつた。然し壬生村で陪臣の藤吉が乘物できてゐるのに勅使の公卿樣が先拂後共でお徒歩とはおかしい。何時も云ふ事だが、かうした古劇は退屈でも構はぬからもつと叮嚀に身を入れて演じてほしい。古い歌舞伎の味は退屈の中の馬鹿々々しさにあるのだと思ふ。

老松若松では錦吾の熱演を褒めたい。芝居が暗いのとストーリーに救ひがないので當興行唯一の新作物としてはあんまり結構な演し物ではなかつたが、扇雀の義經、吉三郎の有國、延三郎の若松、珏藏の濱太郎等、それ〴〵に出來てゐた。次にはもつと若手に恰はしい野心的な新作物を擇んで貰ひたい。

扇雀の椀久も乃父の遺業完成に第一歩を踏出す門出とて力一杯にやつてゐた。茨木屋で願酒を破つて酒亂に陷る條りにはまだ〳〵こなれきれない節々があつたが、大詰別寮での狂態は鴈治郎のそれを思ひ出させる所があつて仲々達者にやつてゐた。然し古來よりの型物と云ふではなし、所詮鴈治郎以外に喰み出す餘地のない十二曲中の幾篇かに復活の息を味き込むのも惡くはないが、扇雀には扇雀として父鴈治郎を踏襲する事以外に別の道がある筈だから、この際さうした方面への關心も忘れてはならない。別寮の場の女中おわかをやつた實三郎の素直さが眼についた事を一言しておく。

芝居印象記

中座と角座

堀川哲

一堺漁人と茂林寺文福兩氏が、我劇壇に動かすことの出來ぬ技倆と、才能を持つた二大喜劇作家であることも、既に定評がある。然も五郎と十吾の藝風に油繪と墨繪の如き差がある如く、その作品にも自づと差のあるのが面白い。

二の替り第四「ハツトン婆さん」が、雄辯にこれを示してゐる。一堺漁人氏なれば、必ずや「ハツトン」の口を借りて、戀愛觀なり、人生觀なりを長々と論ずるところを、茂林寺文福氏は、ワキの口を借りて「ハツトン」の口は借りてゐない。然も拍手は「ハトツン」がサラツて行く。心得たものである。六十の處女、そして結婚——案外手近にありながら發見し難いのが喜劇の材料ではないだらうか。兎に角、これは茂林寺文福氏近來の傑作であることを疑はぬ。

第二の「臨時店員」は、ある百貨店の半日店員募集にヒントを得て、喜劇化されたニュースものである。手法は常踏的ながら良く纏まつてゐる。五つの狂言の中、一つはかうしたものゝある方が、觀客も非常に馴染み易い。

第三の中野實氏作、山上貞一氏演出の選擧肅正劇「ある村の出來事」は簡單に手極良く纏め上げたところ、流石に才人中野氏である。山上氏の輕妙な演出で、非常に見良いものになつた。

× × ×

角座の第一「ヨイトマケは唄ふ」も、此の中野氏の作ではあるが、大變不味い。尤も大變以前の作のやうではあるが、寧ろ此の主題は茂林寺文福、一堺漁人兩氏の世界のもので、確、一堺漁人氏には之と同じ物で傑作があつたやうに覺えてゐる。同じ中野氏の作を選ぶにしても、も少しいゝものを選んで戴きたい。今日の觀客は、もう此の脚本では我慢し切れない程度に迄なつてゐるのである。

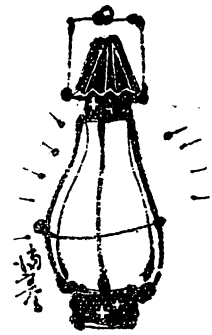
第二の額田六福氏飜案「濁り江に咲く」は、私が原型の「濁流」を觀てゐないもので、何處まで飜案されてゐるものか判らない。唯、此の芝居を觀て感じたことだけを書くことにする。卒直にいへば、私の感服させられたといふのは、プロローグだけである。老踏切番が鷄の母性愛をジュン〳〵と說くところ——此處だけである。幾ら早熟だといつても、あんなにまで早熟た子供はゐるやうに思へないし、母親も亦、幾ら過去が虐げられたものだつたにしても體驗から割出した敎育法が、あんなヒネクレたものだとはどう考へても首肯かれない。座敷に行く母親に對して「ご苦勞樣だな」といふ。「親にそんな口の利き方する奴があるかい」といふのみで聞流してあるところを見ると、チョイ〳〵此の程度の口は利いてゐるらしい。學校をサボツたり、空瓶を賣つたり、蔭では煙草まで喫つてゐるといふ少年である親としては一考しないだらうか？——殊に花街に生活して、子供の將來に希望を抱き「此の子だけは」と育てゝゐる母親が、かうしたことに無關心であるのは、餘りにお芝居過ぎてゐる。拵へ過ぎると、結局嘘々しいものになつて了ふ。觀客も亦、あんなマセた子供を見せられるのは不愉快である。

第三の「雪之丞變化」完結篇。第一、第二と觀てホツとした氣持で觀てゐられるのは此の狂言のみである。瀨川春郎氏の脚色も無理のない結構なものである。唯、完結篇といふだけに、ヤマのないのが淋しいが、これは如何とも仕難いことで、いふ方が無理である。梅野井の奮鬪もさることながら、都築の巧さが何時までも眼に殘つてゐる。（妄評多謝）

前進座

十月狂言に就いて

岸本雄次郎



一

十月浪花座公演に撰ばれたものは落合三郎原作、佐々木孝丸演出、山田籍作作曲

一、「悲戀の白拍子」
映畫の劇化、平田謙三郎演出

二、「清水次郎長」

の二本である。

「悲戀の白拍子」は日本歴史に於いて極めて波亂に多彩であつた源平時代を背景にした美しき白拍子蔀と、佛畫師として世を忍び源氏の落人爲信との戀六波羅の牢を脱れた多田の兵衛綱行、これを追ふ檢非違使切生左衛門重家の奸智とそして蔀への野心と嫉妬、最後に悲戀の白拍子の狂亂——と言つた錯綜せる筋であり、且鳥居言人の源平時代の忠實なる考證を經た裝置、特に清盛の豪奢を寫して舞臺の如きは、衣裳の華かさ、山田籍作氏作曲の今様等々で、浪花座空前の絢爛さを呈するものではないかと思れれる。

斯く觀物的としての充分さを持つ他原作者落合三郎氏獨自の作風が、深い感銘を呼び起す内容を以て構成されてゐる點、特にこの臺本の强味を持つてゐる。

これらの特異性こそ前進座としてうつてつけの狂言であることは勿論であるが、現在の行詰つてゐる大衆劇に新たな一石を投ずるものであり、時代劇の所謂髻物的偏狹さを打破つて、より廣汎な境地を開拓した大衆的の史劇の最前線に立つものではあるまいか。

尚、國太郎の白拍子蔀は、彼の水干緋袴姿の女形としての新工風があるばかりでなく、山田氏作曲の今様のリズムと共に舞ふ踊りは、正に歌舞伎の再檢討をモットーとする前進座にとつてその成果の試金石として相當重大な意義を持つてゐるものと言はなければなるまい。

舞臺の面白さ、人生への感銘、演技の新工風等々、明日の大衆の愛する演劇的要素はこの狂言の中に壓縮されてゐると言ふも過言ではあるまい。

二

「清水次郎長」は國を賣つた次郎長の旅で遇ふ苦難を描いたもので、後に海道筋一番の大親分となる彼の人生の試練、所謂男を磨くと言ふにも餘りにも悲慘な逆境、その中に愛妻を失ひつゝも仁義を堅く守り通してゆく姿である

これは文字通りの大衆劇であり、而も前進座が第一回トーキーとして及第したものを古劇化した等々大衆向きである點は正に滿點である。

しかしこれが單なる一般的な映畫の劇化としてではなく、自ら撮つたものを自ら上演する點、嘗て澤田正二郎にこの反對のものが二三あつた以來絶て他の成し能ざる點に興味があると思ふ

この行き方には相當この道の高級な觀客にも魅力を與へ、劇界に、映畫界に種々な問題を提出すると思ふのである。

兎に角餘りにも人口に膾炙されてゐる次郎長であり、森の石松であるのだから、大衆的であり乍ら、而も大衆の批評眼がある水準の高さを必ず持つてゐる點、長十郎にしろ、甃右衛門にしろ、簡單に容易にやり得る者でないと言ふ逆説的なことが言ひ得る。其處にこそ、前進座が他の並列的な劇團と區別される特長が、觀客の中に際立つて認識されてゆくのではないだらうかと思ふのである。

それぱかりでなく、この狂言は、更に九月一杯を第二回トーキー「街の入墨者」と取組んだ前進座の演技は、この狂言を通して、映畫演技と舞臺演技との新たにして、且具體的な問題を提出してくれることは疑ひのないところである。

三

斯く日々に新たに、止まるところなく精進してゆく前進座は、道頓堀に於て二本立と言ふこれまた他に類のない大膽な狂言の組み方も、看過出來ない特長を示してゐると見る可きである。

型を破ると言ふこと、これは誰もしたくて然も容易になし得ざる點を前進座は果しつゝあることは客認出來るのではないだらうか。

尙且、これに一貫せる系統性を保持しつゝ大衆演劇に新鮮なる衝動を與へつゝあるに於てをやではあるまいか。

前進座もこの十月を以て大阪に八回の公演を重ねたわけであるが、今後は益々此處の土地に足をすえた演劇の發展にたゆみなき努力と意氣を輝かせることであらう。

『悲戀の白拍子』に就いて

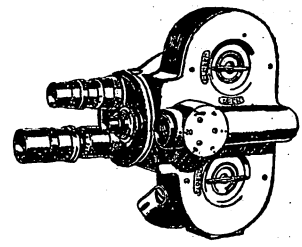
落合三郎

漸く前進座十月興行の「悲戀の白拍子」の舞臺稽古が終つた。鳥居言人氏の裝置と衣裳は、まことに、平安朝末期の繪卷物を見るやうに美しい。そして、國太郎の白拍子が、長十郎の佛畫師が、甑右衛門の槍非違使が、菊之亟の落武者が、調右衛門の情盛が、いづれも、しつとりと、この繪卷物の中へとけ込んでゐる――幽遠な雅樂の昔が流れて來る。

私は、客席から、自作が舞臺化されて行くのを見てゐながら、ともすると「ダメ」を出さねばならぬ責任を忘れてこの美はしい舞臺に醉はされて了ひさうになるのであつた。

全く、私の豫想以上に、豪華な舞臺になつてゐる。俳優諸君も、裏方諸君も、實に、こまかいところにまで神經を使つて、一寸の間隙もない渾然たる作品を見せてくれた。

私は、作者として、前進座諸君のこの努力に感謝したいと思つてゐる。そして、今秋大阪道頓堀の諸座の芝居の中で、斷然、一頭地を拔くヒットであらうといふことを、自作に對する自惚れからだけではなく、確信を以つて、敢て天下に公言したい、と思つてゐる程である。(浪花座にて、舞臺稽古の日)



(全國一流カメラ店にあり)
BELL & HOWELL CO. U. S. A

フィルモ

十六ミリ界の最高峰

未だ曾てフイルモカメラで影して失敗があつたか？

未だ曾てフイルモカメラで一呎のフイルムが浪費されたか？フイルモは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ

……カットは鳳治郎の紙治……

俳優似顔繪頒布

劇團關西新派にあつて特異な存在を示してゐる芳賀敏兼君の畫才は余技を脱し、各方面から非常な絶讃を得てゐるが、本誌は愛讀者のために同君の彩筆に就る東西名優の似顔繪を取次ぎ頒布することに致しました。

特價　色紙　一葉　二　圓（郵税十錢）

申込は道頓堀編輯部宛にて、俳優名及び狂言等御指定下さい。御注文より十日以内にお届け致します。

雜誌「道頓堀」編輯部

ソリウタオネはに核結

淋病にはゴナイン

…花柳病科…

藤原医院

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

淋病にはゴナイン

ソリウタオネはに核結

梅野井秀男を語る

＝日本の劇に於ける女形の不思議な存在＝

森　ほのぼ

まあ盃を干して下さい……何もこれが天下、國家を論じようといふのでもないのだから、まあゆるゆる飲みながら話しませうよ。芝居もつひ此間までは一杯やりながら見物したものでしたがねえ……尤も、大阪には未だ中座、浪花座、角座といふやうな昔の儘の棧敷を持つた劇場があるから――土間こそ椅子席に變つたけれど――盃をかう手にしながら贔屓役者の芝居に、鬱陶しい世間を忘れることが出來るといふものです。この贅澤は今の東京では想ひも及ばないことですよ。本當に羨しい位のものです。東京でも市村座の菊吉合同時代までは未だ土間の眞ン中で、盛ンに德利の數を重ねながら見物したものです。大田村の選んだ狂言には、さういふ氣分さういふ態度で見るのに相應しい芝居が多かつたとも言へます。元來日本の芝居といふものがさういふ工合に出來上つてゐるのでせう。煙草、酒も公然と飲みながら、時々好きな役者の家號を呶鳴つたり、角々の仕科を褒めてみたり、自分でも快心作と許す半疊を入れたりして、全く享樂氣分、遊山半分で見ていゝ芝居だつたのですね。それでは作者も役者も見物に迎合し過ぎてゐるとあなたは言はれるでせうが、一方に作者も役者も今に見ろ、俺の腕であの大肌脱ぎ大あぐらで休み無しに喰つたり飲んだりしてゐる野郎に盃を置かせて、居住まひを直させてやるぞ――そんな自負心を持つてゐたらうと思ひますね。これが日本の大衆劇、市民劇――歌舞伎――だつたのだが文藝協會や自由劇場の新劇運動が膨興し「演劇は娯樂に非ず」といふ建前が物を言ふ時代になつてからは、民衆の芝居に對する態度がガラリと變つてしまつた。と同時に、作者も役者も昔日の作者、役者ではなくな

つてしまつた。芝居といふものに對して誰も彼も眞面目になつてしまつた。早い話が芝居といふ言葉が「劇」と變つてしまつたといふ譯です。イヤさういふこツちの話も知らない間に眞面目、くさつてしまひましたね。

まあ兎に角、日本の歌舞伎といふものは有難いものですよ。不思議なものですよ。すばらしいものですよ。無論、內容から言つても、形式から言つてもです取分けて女形といふもの——思へば不思議な存在ぢやありませんか。毛唐がワンダフルを叫ぶのも無理ではありませんよ。大きく言たら、歌舞伎は女形あつての歌舞伎だとも言へるでせうねえ。變態的な發達だと言へば、それもさうですが、その發達の經路——歷史だけでも面白いぢやありませんか。

古くは芳澤あやめ、瀨川菊之丞、中村富十郎、三代目菊五郎等から下つては半四郎、しうか、田之助——私達はもう似顏錦繪でその面影を想像するに過ぎないが、かういふ魅力のある美しさを持つた女形が尠くなかつたのですねえ。

今の新派も女形あつての新派だと云はれてゐますが全く喜多村、河合、花柳、英といふやうな女形が居なかつたらとても現在のやうな更生ぶりを見なかつたらうと思ひますね。近頃評判の梅野井秀男も、事實關西新派を背負つて立つてゐる形ぢやありませんか。あの優の蠱惑的な魅力には流石の喜多村、河合、花柳も一歩を讓るでせう。さういふ點で、例の田之助を聯想しますよ。

梅野井の女性は無智ではあるが、肉體も魂も男の爲に惜氣なく捧げて行ける感情一方の女です。喜多村も河合も、花柳もあれ程無智な女にはなり切れません。私はあの梅野井の無智を愛します。笑つちやいけませんよ。無論あの蠱惑的な美しさにも參つてゐるンですかね。

あの優は酒の方でも有名ですね、彼イヤ彼女の爲に此盃を捧げませう——。

◈編輯後記

◈村上　勝◈

※酷い連日の雨空もどつかへ追ひやられ、爽涼の秋になりました。愛讀者の皆さまにも、諸先生方にもお變りないことゝ存じます。

※本月各座の陣容は歌舞伎座の東京新派、浪花座の前進座、角座の關西新派、南座の家庭劇等に、中座へは十三日より新國劇（目下は溫習會）が來演する。本誌もこの各座の陣容に隨つて、諸先生に御執筆願つた。

※先づ新國劇に就いては長谷川伸先生が語られ、その他各劇團に就いては、菱田、高谷、大橋、氏川氏などが玉稿を寄せられた。

※その他、特別讀物としては都築文男氏の續きもの、森氏の梅野井論など、何れも實のある讀物である。殊に都築氏のものは、連載ものので次號からは、主だつた俳優の寫眞などを挿入誌上を飾りたいと思つてゐる。今月は何分締切間際に原稿を頂いたので、どうすることも出來なかつた。

※西尾氏と共に本誌の劇評、新劇壇の戲曲評を擔當せられてゐる堀川哲君は、今後もこの方面は勿論、樂屋探訪その他に活躍される筈である。

※口繪の寫眞の內東京新派の舞臺面が完全に行かなかつたが、何分發行を急ぐので、御諒恕ありたい。

※次號も更によき讀物で飾りたいと思つてゐます。終りに御執筆下さいました諸先生に厚く御禮申上げます。

昭和十年十月一日發行
月刊 雜誌『道頓堀』第十年 第百八號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部　金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十年十月一日印刷
昭和十年十月一日發行

大阪市南馬離波新地三番町
（大阪歌舞伎座內）
發行者　松竹興業株式會社大阪支店　鳥江鐵也
共同編輯　山上貞一　松本泰三
印刷所　道頓堀社印刷部

大阪市南區離波新地三番町
（大阪歌舞伎座內）
發行所　松竹興行株式會社大阪支店
道頓堀編輯部

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十年九月廿一日印刷（毎月一回）
昭和十年十月一日發行（月發行）
「道頓堀」第百九輯 第十年十月號

「道頓堀」 第百九輯 第十年 十月號

一部 金參拾錢